

Next Age

次世代のチーム！

国境も世代も超えて強みを提供し合い、機能する次世代の「チーム」に迫る。その特徴を、チームマネジメントやメンバーシップに詳しい日本ラグビーフットボール協会・中竹竜二氏が分析する。

“ゾンビウォーク”と新しいアイデアの間にあるもの

「Have a nice daaaaay!!!」。取材が終わった瞬間、パトリック・ニューウェル氏はスケートボードに乗って去っていった。彼こそ米国発のアイデアスピーチイベント、TED（テッド）を日本に持ち込み、TEDのような、それでいて独自性を持つTEDxTokyo（テデックス・トーキョー）の仕掛け人の1人である。TEDは1つの業界に偏らず、多様な人びとのアイデアが交差する場を提供し、未来をつくることその目的だ。ニューウェル氏は、子どもたちの自由な発想と個性を育むことを目的に東京インターナショナルスクールを創設。21世紀にふさわしい教育法の開発、アントレプレナーシップを創出する場づくりの支援など、その活躍の場は幅広く、彼がかかわるすべての場にアイデアが溢れている。

そんなニューウェル氏は、毎日、東京の街をスケートボードで走り抜ける。違う時間に違う道を通り、違う街並み、違う人の顔を見ては、頭のなかに「！

（新しいアイデア）が生まれる。「大事なことは、“関係ない”ものにたくさん出会うこと。関係ない・関係ない・関係ない……関係ある！この瞬間が大事。一見、関係ないものをつなぐことで、面白いアイデアは必ず生まれるんです」と、ニューウェル氏は強調する。2012年にオープンした渋谷ヒカリエでTEDxTokyoを開催した。そのアフターパーティをどこでやろう、と考えていたとき、ふと目に入ったのが渋谷の金王八幡宮だ。「新しい渋谷の象徴と900年前の渋谷を結び付けたら、新しい世界が生まれると思いました。結果は、名プレゼンの嵐でした。“1+1=11”というのは僕が考えたTEDxのテーマの1つ。異質な“1”が出合うと、2ではなく、11になるくらいパワーを發揮します」

「ゾンビウォーク」。通勤・通学する朝の日本人をニューウェル氏はこう表現した。同じ道と同じ時間、同じ方向に向かって歩くオートマティックな姿

今号のGUEST



パトリック・
ニューウェル氏

教育活動家
TEDxTokyoオーガナイザー

Patrick Newell_米国出身。世界各国の学習環境の変革と向上を目指して活動する。東京インターナショナルスクールの共同創設者。児童養護施設の子どもたちや起業家の支援なども行う。

に、気はない。「五感を使ってこそ、第六感が動き出す。カフェの人の表情、電車の広告、新しいビルが結び付いて、アイデアになるのです」

いつも同じ時間、同じ席に座り、同じメンバーで会議をしている、新しいアイデアは生まれない。多くの読者の方は、「それはわかっている」と言うかもしれない。そして、「多様な人材が組織のなかに多くないのだから、仕方がない」とも。しかしニューウェル氏は、「そんなことはない」と反論する。彼が企業にアドバイザーとして入るとき、オフィスの一つひとつのフロアをすべて見て回る。「同じように見えても、全部違う！」。そこで、たとえばフリーアドレス、たとえばメンバーをシャッフルした会議など、違いを見つけてぶつけ合う作業を丁寧にしていく。日常のなかに非日常を、ルールのなかに自由を仕込む。それがゾンビウォークと新しいアイデアの“間”にあるものの1つ、である。

*「ゾンビウォーク」と新しいアイデアの間にあるものは、ほかにもあります。中竹氏の詳しい分析とあわせ、Web版 <http://www.works-i.com/wp/nextage/122/> に掲載しています。

“自由”とは、“ルール”である

ニューウェル氏に会えば、誰もが「自由な米国人」思うでしょう。でも、本当にそうでしょうか。彼が自由をここのほかに愛し、大切にしているのは間違いありません。しかし、自らが、そして自らが参加するチームがアイデアを出せるように、“自由”という厳しい“ルール”を設けています。具体的には、「関係ない」に出会うための仕込みが、その1つ。「アイデアを自由に出していいよ」と言っても、人はすぐにそうできるものではありません。そうしたのであれば、自由というルールをチームのなかに浸透させなければならないのです。



中竹竜二氏

日本ラグビーフットボール協会
コーチングディレクター

Nakatake Ryuji_早稲田大学人間科学部卒業後、渡英。レスター大学大学院社会学修士課程修了。三菱総合研究所を経て、早稲田大学ラグビー蹴球部監督、ラグビーU20日本代表監督を歴任。フォロワーシップ論の提唱者の1人。